

非当事者として聞き取り調査をすること ある日韓ダブルのアイデンティティの事例から

今 里 基

(立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

1. はじめに

「インタビューによってそれまで考えもしていなかったアイデンティティ¹⁾に目覚めてしまったのではないか」。これは、筆者が修士論文²⁾にて本稿で登場する日韓ダブルのAさんを含めた韓国にルーツを持つ若者を対象としたインタビューを通じて抱いた疑問である。たとえば、筆者は、かつてAさんも含めた3人の日韓ダブルの被調査者に「自分のアイデンティティはどこにあると考えますか? ³⁾」という質問をした。それに対してAさんは、自身の日韓ダブルという属性に照らして「半分半分」と回答した(今里基 2017: 30)⁴⁾。しかし筆者がアイデンティティの「所在」を問いかける質問形式をとらなければ、彼女たちのアイデンティティはもっと個別的で独自なものになった可能性がある。それどころか彼女たちは、筆者による問いかけによって、「半分半分」に分割されるような、「日本人」と「韓国人」の二者択一的なアイデンティティを強く意識し始めてしまったのではないか。こうした疑問が生じたこと自体、アイデンティティを問うインタビューとしては失敗かもしれない。だが、この自問を突き詰めてみることは、在日コリアンを対象とした研究を「在日コリアン」ではない者=非当事者が実施する際の問題を浮き彫りにすることにもなりうる。

本稿の目的は、筆者の日本人としての立場性や筆者自身の在日コリアンに対する認識枠組みが、日韓ダブルの女性たちのアイデンティティをめぐる語りにもどのような影響を与えたのかを検討することで、非当事者である調査者が調査をおこなう際の問題一時として暴力性を表出してしまう可能性⁵⁾を明らかにすることである。

被調査者による語りや、調査者自身の立場性だけでなく、インタビューをおこなう被調査者との関係性やインタビューを行なった場所や場面等によって変化することは、在日コリアン研究に限らず、人文社会学的な研究で広く指摘されてきたことである。例えば、塚田守(2008)は自身が行ったインタビューを事例に、自身が男性であ

ることや質問の仕方の結果として、想定していたものと異なる語りや研究において違う切り口が発見されたことを、「反省」と位置づけながら、明らかにしている。また、インタビュー協力者から本音を聞き出すためにはラポールを構築することが重要であるとされるが、特に人間の意識(変容)を調査するインタビューの場合、インタビューをしている場所⁵⁾によって語りが変化することもある(今井信雄 2005)。

だが、とりわけ本稿が対象としている日本で暮らすコリアンの場合、被調査者と調査者との「人格的な関係性」や「場所」「場面」だけでなく、日本と韓国との政治的関係性や、各時代の「在日コリアン」が置かれた日本の社会状況—例えば、ヘイトスピーチや韓流ブーム—がインタビューで得られる語りに大きく影響をもたらす。日韓ダブルのAさんたちに、日本人、すなわちマジョリティである「筆者」が「アイデンティティ」について聞き取り調査をすることには、日本人と在日コリアンとの関係性や政治的問題、社会状況が反映されることとなる。ここでの論点のひとつは、「(非)当事者性」である。

例えば、李洪章(2016)は、現代を生きる在日朝鮮人による自身のエスニシティに向き合う実践について、インタビューを通じて分析を行った。李の著書の出発点は、在日朝鮮人である李自身が研究開始当初、「当事者」という立場に強いこだわりを持っていたことにある。李は、オールドカマー⁶⁾の日韓ダブルである安田直人にインタビューを行った際、彼の「抑圧者としての日本人と被抑圧者としての在日朝鮮人という二項対立的な問いの立て方は不毛である」という主張に一人の「当事者」として違和感を持っていたという⁷⁾。しかし自分自身の「当事者」性が、同じ「当事者」カテゴリーの多様性を不問にすること、またその多様性の中に存在する異なる人々のあいだの当事者性の強弱を評価することになっていくという問題に気付くようになった。その結果、李は「当事者研究」から手を引き、自身の当事者性のバイアスと折り合いをつけながら、「個人」の日々の実践へと目を向けることとなる。それは「当事者」である筆者(李)の立

場性を不問にすることはできないという一定の限界を認めながらも、筆者の経験や違和感、衝撃などの「実感」から語りを選択し、その正体を探りながら、インタビューの経験の理解を試みるというものであった。そして李は「個人」のエスニシティをめぐる実践に着目した結果、オールドカマーが従来、「被害性」を軸に語ってきたと考えられる「大きな物語」からではなく、個人の「小さな物語」の中で自身の経験に基づいてエスニシティの位置づけを決めていることを明らかにした。

筆者は、両親の系譜ともに韓国にルーツをもたない、日本国籍をもつ「日本人」である。先の李の議論にひきつけられれば、筆者は「非当事者」である。第3節以降で述べる日韓ダブルの語りは、マジョリティである日本人と日韓ダブルとの間の二項対立的な設定を念頭に置きながら、日本人として彼女たちにアイデンティティやライフヒストリーについて聞き取り調査をした結果である。うがった見方をすれば、上述した「半分半分」という回答は、このような日本と韓国の二項対立図式を念頭に置いた筆者に対する「気遣い」である可能性もある。筆者の「非当事者性」は、彼女たちの回答やアイデンティティの変容にどのような影響を与えたのだろうか。それは、当事者である李が、日韓ダブルにインタビューする場合とどのように異なった問いを生じさせるのか。このような問いを検討したいと考えたのが、本稿の出発点である。

ただし結論を一部先取りすると、インタビューでは、日本人と韓国人という二分法的な図式、あるいは調査者が当事者か非当事者かといった枠組みよりも、オールドカマーと日本人のダブルとは異なる、韓国系ニューカマーと日本人のダブルとしての側面に対する筆者の認識がより問題化することとなった。李が対象としたのは、主にダブルを含む「オールドカマー」であるのに対して、筆者が調査をしたのは、いずれも韓国系「ニューカマー」と日本人のダブルの若者たちである。筆者が韓国系ニューカマーと日本人のダブルに光を当てようと考えたのは、次節で述べるように従来の在日コリアンのアイデンティティをめぐる研究がオールドカマーの研究に偏重しており、韓国系ニューカマー2世の研究は立ち遅れてきたことにある。また、現在の在日コリアンはオールドカマー、ニューカマー問わず、ダブルが多数派となっているため、ダブルを対象とすれば、オールドカマーと韓国系ニューカマーの比較研究も可能であると考えた。

しかしまさにそのような比較の観点に立っていた筆者は、韓国系ニューカマー第2世代の若者に対するインタビューの際にも、オールドカマーを対象とした議論を念

頭におき、差別の経験や、通名使用をめぐる葛藤などを題材として聞き取り調査を進めようと試みた。だがそれは、韓国系ニューカマーと日本人のダブルの彼女たちのアイデンティティを「オールドカマー」をめぐる言説から導きだした「在日コリアン像」へと回収しようとしたことに他ならず、その結果、彼女たちにとって必ずしも自明であったり関心があったりするわけではない事柄について彼女たちに思考するよう迫ることとなってしまった。本稿では、このような日本か韓国かといった二者択一的な筆者の認識枠組みにおいて筆者が日韓ダブルの彼女たちにおこなったインタビューでのやり取りを自省的に検討する。インタビューでのやり取りに見られる「ちぐはぐさ」や彼女たちによる筆者に対するまなざしを考察し、実際には彼女たちが筆者の「非当事者性」ではなく「当事者性」を軸足に語りを選択・構成していたことを論じる。それを通じて、非当事者性をつよく意識したインタビューのあり方の問題点を指摘したい。

その前に、在日コリアン研究において韓国系ニューカマー第2世代の研究、とりわけ韓国系ニューカマーと日本人との間に生まれたダブルの研究が立ち遅れてきたことを簡単に説明し、筆者がどのような研究を念頭において、日韓ダブルに対するインタビューを企図したのかを述べておきたい。

2. 在日コリアン研究における 韓国系ニューカマーダブル

在日コリアンによるエスニックアイデンティティの継承やアイデンティティ・ポリティクスをめぐる議論は多角的になされてきた。例えば、在日韓国人の若者を対象としてアンケートやインタビューなどの調査を用いて彼らのアイデンティティについて分類を試みたもの（福岡正則 1993、福岡正則・金明秀 1997）、在日コリアンのアイデンティティの枠組みが時代の変化によって多様化されたことを背景として、第二世代にとって第一世代にとっては解放の手段であった「在日アイデンティティ」が「個」の抑圧につながっていることを示し、「民族アイデンティティ」と「個のアイデンティティ」のジレンマを超克する「戦術的な」アイデンティティの可能性を論じたもの（金泰泳 1999）などがある。しかし、これらで取り上げられている韓国にルーツを持つ若者は、李洪章（2016）が第4章で扱っている箇所を除いて、両親がどちらも在日コリアンのオールドカマーである。

これに対して、韓国系ニューカマー第2世代に関する

研究は、立ち遅れてきた。また数少ない韓国系ニューカマーの研究も、主に教育社会的な関心のもとで展開してきた。例えば、朴貞玉（2010）は韓国学校の保護者へのアンケートから保護者が韓国学校を選択する理由を検討してきた。また、金花芬・安本博司（2011）、安本博司（2013）、安本博司（2016）では韓国系ニューカマー第2世代を中心に母語継承や家庭内でのアイデンティティの継承を論じている。ただし、これらは親の視点から間接的に検討したものであり、直接的に当事者に注目したものは管見する限り存在しない。ニューカマーの第2世代全体にまで範囲を広げると、子どもである第2世代の言語の習得や、不就学などの問題が表面化するようになり、まず学校のエスノグラフィや支援の現場へのフィールドワークを中心とした研究が登場するようになった（志水宏吉・清水陸美 2001、宮島喬・太田晴雄 2005 他）。その後子どもたち自身のアイデンティティを検討した研究も登場している（三浦綾希子 2015、児島明 2013 他）だが、これらのニューカマー研究において、韓国系ニューカマーの第二世代は、言語や不就学の問題が少ないとされ（金花芬・安本博司 2011）、極めて限定的にしか取り上げられてこなかったのである。

以上で説明したように、在日コリアンをめぐる研究動向には、オールドカマー研究と韓国系ニューカマー研究とのあいだで主題や課題設定において断絶がある。オールドカマーと韓国系ニューカマーがお互いをルーツは同じでも違う存在としてみなしていること（李光奎・崔吉城 2006、崔吉城 2008）は指摘されているが、オールドカマー第二世代の若者を対象として金（1999）が論じたような、民族アイデンティティと個としてのアイデンティティの葛藤やその乗り越えに関わる韓国系ニューカマーの若者独自の実践や考え方については、ほとんど研究されてこなかったのである。

以上のような問題意識の上で、筆者は、韓国系ニューカマーの日韓ダブルの若者に光を当てた。その理由は、「はじめに」でも触れたように、まず統計的に見れば、在日コリアンで日本人と婚姻した者の割合は1955年の30.5%から2013年には87.7%⁸⁾となり、圧倒的に「日韓ダブル」が日本の在日コリアンの中で多数派を占める時代となった。そのため、オールドカマーの同世代の若者との比較研究がしやすいと考えたためである。また先述の李洪章（2016）もそうであるが、川端浩平（2014）は、日韓ダブルである当事者が、社会運動や民族運動に関わることを通して、自らの帰属意識に対して戦術的にそれを選択していることを明らかにしている。ここで登場し

ている日韓ダブルたちは従来のオールドカマー、ニューカマーという流入経緯による違いに限らず、民族学校への通学経験の有無や、家庭での成育環境、民族団体の経験など、李が述べるような「個人」のルーツではなく、ルートによってひとりひとりの戦略が異なっている。そのような個人の経験を、個々のライフヒストリーの聞き取り調査を通じて丁寧に明らかにすることで、多様化している在日コリアンのなかで、韓国系ニューカマーの日韓ダブルの若者たちが、同世代のオールドカマーの日韓ダブルと異なりうる、いかなる課題を抱え、生を紡いでいるのかを明らかにしようと仮定したのである。

3. 語りの「文脈」の異なる筆者とインタビュー対象者のやり取り

3-1. インタビュー対象者の紹介

本稿で登場する日韓ダブルのインタビュー対象者は、冒頭で登場するAさん及びBさんの二人である。Aさんは女性、1995年生まれで埼玉県出身・在住である（2017年3月現在）。家族構成は、ニューカマー1世の韓国人（来日は90年代前半）である父親、日本人の母親、長女（Aさん）、次女である。Aさんは、小学校から高校まで日本の公立学校に通い、現在は私立大学の学生である。韓国政府が運営に関わる東京韓国学校に代表される外国人学校や、朝鮮総連傘下の学校法人が運営する朝鮮学校に通った経験はない。高校生の時に韓国でホームステイ、大学生の時に1カ月の語学研修、釜山の大学に1年間の留学経験がある。日本と韓国の国籍を二つ持っている。また、名前は、表記・読みともに韓国式である。国籍上の名前は日韓共通である。

Bさんは、1994年生まれで神奈川県出身の女性、釜山の私立大学に交換留学ではなく、正規の学生として入学している（2017年3月現在）。家族構成は、日本人の父親、韓国系ニューカマー1世（来日は90年代）の母親、長女（Bさん）、弟が2人である。小学校と中学校は公立、高校は私立である。韓国の大学に進学するために1年間「語学堂」と呼ばれる大学付属の韓国語の語学学校に通った。Aさんとは違い、Bさんは日本の国籍のみをもつ。また、名前もAさんと異なり、日本式である。AさんとBさんは、Bさんが通っている大学の寮で1年間同居した経験を持つ。

なお、本稿の内容は今里基（2017）でその一部を扱っているが、拙稿の刊行以後にAさんに対して行った追加インタビューなどを交えて再構成している。それを元に

本稿では筆者とAさん、またBさんとの出会いに焦点を置いて考察をおこなったことを予め断っておきたい。また、倫理的配慮として、インタビュー終了後文字起こしを行い、内容の確認を行っていることも付記しておきたい。

3-2. マジョリティからの差別や偏見に対する意見

Aさんにはじめてインタビューを実施したのは2015年9月である。筆者は、Aさんと出会う前にBさんに数度インタビューを実施しており、「日韓ダブルや韓国系ニューカマーの子で知っている子がいたら紹介してほしい」と依頼した。そしてBさんに紹介されたのがAさんであった。筆者は、Aさんの前に何度か同じ設問で別の人も聞き取り調査を実施していたため、インタビューには慣れていたつもりであった。しかしそれらのいくつかは福岡・金（1997）の量的調査での質問票⁹⁾をもとに作成しており、語りを見直してみると、筆者の質問に対する回答には「うーん」などの前置きが多く、返答に窮したものが散見される。例えば以下のやり取りである。

筆者：Bさんがめっちゃ困って答え（が）ないですって言った質問ね。あなたが韓国に対する差別や偏見がこれから悪化したら、例えば署名活動やデモに参加しようと考えますか？

A：署名ぐらいだったら。

筆者：Bさんは困っちゃったんだけど、その時に出した例が家に物投げられるとか。

A：ああ。

筆者：具体的に。いわゆるオールドカマーが受けてきたような差別が今後起きるようになったらってことかな。ないと思う。

A：実際にされたら行動するんじゃないんですか、私は多分。

(2015年9月27日)

ここで筆者が想定していたのは、韓国系ニューカマー第2世代やそのダブルが、マジョリティである日本人から韓国人として差別や偏見を受けた結果として、何らかの被害者意識を持っているのではないか、というものであった。Bさんは困惑して思いつくことがないと答え、Aさんは答えてはくれたものの、実際に経験がないため、想像しながらの回答になった。

その後Aさんとは何度かやり取りを重ね、さらにBさんとAさんと3人で会う機会を持ち、日韓ダブルである

ことに限らず、韓国の大学の話や進路、バイトの話などインタビューとは直接関係のない話もするようになった。だが、その際にも、筆者は在日コリアンとしてのマジョリティとの関係性に対する関心を捨てられなかった。

上述した通り、Aさんは、一貫して日本の教育機関で学んでいる。家庭内では、なるべく韓国の習慣にあわせて育てようという方針もあり、彼女も韓国の習慣をいくらか身につけた。生い立ちに関するインタビューのなかで、Aさんは「日韓ダブルという理由で差別された経験はない」と繰り返した。だが、「何かあるはずだ」という筆者の意図を察したのか、今振り返れば、それらの家庭内での習慣がトラブルの原因だったようにも思うと語ってくれたエピソードがいくつかある。

小学生の時、教室の中って狭いじゃないですか。それで、おたがい「あっ、あっ」みたいになったときに、どっちが譲るかみたいな。日本人はすぐごめんねっていうけど、私なんも言わなかったから、ちょっと友達に陰で言われたことはある。(2015年9月27日)

ただしAさんは、陰口を言われたことはあったものの、当時はそのような陰口は自身の出自を理由としたものではないと考えていたことも強調した。また名前が韓国式であったため、発音しないと先生に覚えてもらえなかったといったエピソードも語った。これも確かに彼女が日本で暮らす困難性のひとつではあるだろうが、在日中国人やその他の外国人にも当てはまりうる問題であり、筆者がオールドカマーを扱った文献を参考にしてマジョリティからの差別や偏見について聞き取ろうとした文脈においては、ややちぐはぐな回答であった。こうした「ちぐはぐさ」は、「祖国留学」に関するインタビューでも生じていた。

3-3. 「ルーツ」に対する関心

Aさんは前述の通り釜山の大学に交換留学をしているが、その理由を当初、次のように語っていた。

筆者：（そういえば）なんで韓国の大学、韓国語の勉強をするようになったかの話ちゃんと聞いてなかった。

A：やっぱりお父さんが韓国人だから。しといたほうがいいかなって。

筆者：その留学と、日本語教育と韓国の大学の留学とはリンクしてる？

A：韓国の大学とかでも、将来教えられたりとかそういうことできたらいいなあって。

(2015年9月27日)

このような問いかけをした筆者が想定していたことも、オールドカマーによる祖国留学の経験を扱った研究を参照してのことであった。オールドカマーを扱った文献(鄭幸子 2010、윤다인 2014)では、ルーツを希求したり差別的な日本を脱出したりするために祖国に留学した彼らが、本国の韓国人との出逢いを通じて「日本人でも韓国人でもない」という葛藤を経験し、「在日」としてのアイデンティティを再定義することが論じられてきた。同様に、Aさんの留学の契機にも、自身のルーツへの希求や「脱日本」的な意識が関係しているのではないかと仮定した。だが、今里(2017)でも詳述したように、Aさんの留学動機は韓国のルーツとリンクする形での日本語教育を学べる大学を選択したこと、あるいはK-POPの影響であり、その時点でも必ずしもルーツにこだわっていない点が見受けられていた。

ここで興味深いことは、「ルーツ」として筆者が想定していたのは「韓国」という「国」または「韓国人」という「血」に関するものであったが、以下で説明するように、Aさんが「お父さんともっと話したい、知りたいという思いで韓国語も勉強してるんです」と語った際の「ルーツ」は、そのような「韓国(人)／日本(人)」の枠組みではなかったことである。それが明らかになった契機は、2017年夏に韓国において公開された映画『タクシー運転手』について話していたときのことであった。

この映画は1980年に韓国南西部の都市、光州で発生した民主化運動である「光州事件」をモチーフとした映画である。光州事件とは軍事政権に強く反対し、一般市民が武装蜂起を行った結果、軍との衝突により多数の犠牲を出した事件で、現在まで語り継がれている。映画では光州事件取材したドイツ人記者とそこにソウルからタクシー運転手としてタクシーで同行した男性の視点からの光州事件が描かれている。光州は全羅道に位置するが、全羅道はAさんの父の出身地でもあった。Aさんは、この映画が公開される前から筆者とのインタビューの中で「父は光州なのでいろいろと苦労したみたいで…」と何度か父の出身地についての関心を語っていた。

光州を含めた全羅道に対する差別は韓国社会でも今日に至るまでよく見られる事象で、全羅道との対比で比較

される慶尚道との経済的な格差はかつて歴然としていた。それゆえに、全羅道出身の金大中が1998年に大統領に就任した当時、韓国メディアはエポックメイキング的な取り上げ方をしたほどである。Aさんの父も国民学校¹⁰⁾までしか学校に通うことができず、その後結婚するまでに苦労を重ねたとのことである。『タクシー運転手』について、Aさんは父親が1960年代生まれであることを念頭において、「光州事件の時、(父は)10代後半で、当時どんなことをやっていたのかは詳しくはわかりませんが、どうだったか知りたいです」と語った。彼女が知りたいと考えていたルーツは、韓国人としての父親ではなく、光州という具体的な土地で暮らす人々が経験した歴史そのものであったのだ。

映画についてのやり取りは、結果的にAさんの留学をめぐる動機をより詳しく知る機会となったが、彼女の語りを引き出したのは、2017年という時期にも大きく依存していた。2017年は、Aさんの父親の故郷である光州において重要な出来事が重なった。この年は『タクシー運転手』が公開されただけでなく、保守系の朴槿恵前大統領が2013年に任期中に1度だけ出席して以来、4年ぶりに光州事件の追悼式典に革新系の文在寅大統領が出席するという歴史的な事件が起きた。

また同年、『タクシー運転手』公開の少し前にAさんから「私、住民登録番号があったらいいんです」と報告も受けている。住民登録番号とは、韓国国民一人一人に割り当てられている番号で、韓国人にとっては身分を示す最も重要な番号である。先述した通りAさんは日韓の二重国籍であるものの、生まれてから日本で育っているため、その存在自体を想定していなかった¹¹⁾。Aさんはその住民登録番号が入った証明証の写しを筆者に見せてくれた。そこには確かにAさんの韓国名と13桁の番号が記載されていた。そのときには、「こんな大事な証明証見せて大丈夫なのか」と心配したが、それは後になって考えてみれば、上述したやり取りに見られるように、「韓国人」としての自身のルーツに対する特別な思いを知りたがる筆者の意図を理解し、韓国人としてのルーツの一端を示そうとしてくれたのだと思われる。

4. 筆者の経験と「ダブル」としての経験とのすり合わせ

上述した筆者とAさんとの「ちぐはぐ」なやり取りは、「はじめに」で述べたように筆者が、オールドカマーの研究を参照して差別や偏見といった経験や「祖国留学」を

めぐる「ルーツの希求」やアイデンティティクライシスを想像しながら彼女たちに質問したことによる。それに対して彼女たちは、「差別」「いじめ」「ルーツ」などに関連する記憶や思いを語ってくれたが、それらの「ちぐはぐ」な回答はいずれも筆者自身の立場性、すなわちマジョリティである日本人として、あるいは「日韓ダブルではない」という意味での「非当事者」として彼女たちに接していたこと自体を自省する契機となった。

筆者がAさん、Bさんにインタビューを開始したのは、筆者が韓国の大学の修士課程に在籍していた時である。筆者が調査を開始する際にBさんを紹介したのは、筆者の学部時代の後輩である。そのため、少なくともBさん（あるいはAさん）からすれば、日韓ダブルに興味がある研究者というより、「後輩の先輩」のような立場の人間として受け入れていたと考えられる。また、ここでより重要なことは、筆者自身も（その当時）韓国の大学院に在籍し、「留学」の経験—日本で暮らしていた者が韓国の文化に接して様々なカルチャーショックを受ける経験—をしていたことである。筆者は、2013年9月から2016年2月まで韓国の修士課程にて大学院生活を送った。同時期に、大学こそ異なるものの韓国留学をしたという意味で、筆者とAさん、Bさんのあいだは、多くの共通した経験があった。

韓国留学での戸惑いや楽しさ、発見については、インタビューやそれ以外のプライベートな部分でも数えきれないほど話す機会があった。むしろ彼女たちはそのような筆者との共通の経験を想定しながら多様な語りをしていた。例えば、筆者がAさんとBさんが同じ時期に一緒に暮らしていた際の思い出が何かあるか尋ねた際に、「はっきりと思い出せない」と言いつつも、「ハーフあるある」について二人でおしゃべりしていたと教えてくれた。その「ハーフあるある」のなかで、Bさんが韓国人の母親から抱き着かれたというエピソード¹²⁾は、ダブルではない筆者にも経験のあることだった。

B : めっちゃ鬱陶しいって言っていました、高校の頃。

筆者 : これなあ、昔片思いしていた子（注・本国の韓国人）の家に行ったことがあって、その子の母親に抱き着かれた記憶あるなあ。そういえば。¹³⁾

自分たちの経験が筆者に実感的に受け止められたことで、二人は「ハーフあるある」を中心に多様なエピソード

を語ってくれた。筆者は在日コリアンでもなければダブルでもない。だが、彼女たちは、筆者が韓国へと留学したことで、彼女たちが家庭内で経験していた事柄—たとえば、スプーンでご飯を食べる、肩膝をついて座る、スキンシップを好むといった慣習や文化、社会関係のあり方に関することなど—を少なからず経験したことを知っている。彼女たちは、そうした日本での生活から韓国での生活へと移動した筆者と共有できるだろう「かつての日常的な出来事での些細な疑問やトラブル」—たとえば、上述したAさんの学校でのエピソード—などを語っていたのである。この意味で、筆者は「非当事者」ではなく、日本と韓国の狭間におかれた「当事者」として語りかけられる存在であったのだ。

ただし、ここで重要なことは、本稿の冒頭で紹介したAさんの「半分半分」という語りや、Aさんによる住民登録番号の証明書の提示にあるように、筆者の働きかけは、彼女たちは日本と韓国のあいだで自身のアイデンティティの所在を思考するという機会ともなったことである。最後に冒頭の問いに立ち戻り、韓国系ニューカマーの日韓ダブルの研究における研究者の（非）当事者性について考えてみたい。

5. おわりに

本稿では、インタビューにおける筆者とAさん、Bさんとのやり取りを事例に、日韓ダブルの若者に「日本人である調査者」が聞き取り調査をおこなった際の問題点を検討してきた。本特集の序章において、永田は某研究者が調査している京都・東九条の在日コリアンの集住地域にある交流施設にフィリピン人グループを紹介したことをきっかけに、東九条にフィリピン人が来るようになり、在日コリアンとの交流が始まり、結果的に自分が「巻き込まれた」ことを語っている。

筆者は、インタビュー協力を当初、李と同様に、日韓ダブルを「加害者」と「被害者」の二項対立図式で理解しようとしていた。オールドカマーの先行研究を読み進めていたことも相まって、振り返れば、筆者がマジョリティとしての「加害者意識」あるいは「贖罪意識」をオールドカマー、ニューカマー、日韓ダブルに関わらず、抱いていたことは間違いない。実際にAさんらにしたのと同様の設問を、韓国に留学したオールドカマーの若者にした際には、先行研究での指摘にぴったりと当てはまる回答を得たこともあった。ここでの非当事者性とは、筆者にとっては、ある種の「加害者意識」でもあったのだ。

しかし、彼女たちの語りからは、そうした筆者の一方的な「加害者意識」「贖罪意識」を裏づけ、その自己反省のもとで彼女たちの立場に寄り添う／代弁する主張を展開しようとする語りは得られなかった。実際には、彼女たちは、筆者との共通性—すなわち韓国への留学、あるいはそれを通じた韓国の慣習や歴史、地域的な異なりなどに対する理解—をヒントに、「差別」や「ルーツ」など筆者が問いかけた内容に一定の回答を提示しようと試みていた。そのような彼女たちの試みが理解できなかった筆者は、AさんとBさんから筆者の想定に当てはまる回答を引き出そうと質問を繰り返し、日本と韓国の二項対立的な枠組みでアイデンティティを考えるよう自身の研究課題に「巻き込ん」でしまった。在日コリアンの語りにおいて、日韓の政治的関係やマジョリティである日本人としての立場性、当事者—非当事者の関係性が介在するという意識を自省的にもつことは、研究者としては必要なことであろう。だが、そのようなマジョリティ意識や非当事者意識が、彼女らを筆者と重なり合う部分をもつ個人ではなく、「異なる存在」「被害者」として位置づけ、彼女たちに対して無意識的に「他者化」の暴力を行使することになることには慎重になるべきである。

AさんとBさんは、筆者に対して様々な自己規定をしていた。筆者が「日韓ダブル」として一枚岩的にまなざしていた二人は、最初から筆者のことを「日本人」ではなく「後輩の先輩」であったり「韓国に留学した日本人」であったり「同年代の男性」であったりと多元的にまなざし、それに応じて語りを選択したり構成していた。そして筆者によるインタビューを通じて、筆者という人物の理解に、在日コリアンに対して特有の理解をしている人物という側面が加わったと思われる。そのような「筆者」とのやり取りを通じて微細に変容していく彼女たちの多元的なアイデンティティのあり方を分析していくことをこれからの課題としたい。

【謝辞】

本論文作成に関し、インタビューにご協力いただいたAさんとBさんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

注

- 1) アイデンティティとはアメリカの発達心理学者のエリクソンが提唱した概念である。日本語では「自我同一性（あるいは自己同一性）」という意味で、青年期の自我の形成を通して自己を確立させるという意味である。詳細はEricson (1959=2011)を参

照。現在では青年期の自我形成に限らず、自己を確立させること全般に広く用いられている。

- 2) 筆者は韓国の東西大学に『韓国にルーツを持つ若者のエスニックアイデンティティ——「継承」と「同化」の検討』という修士論文を提出している。
- 3) この設問に関してはアメリカの社会学者 Rumbaut and Portes (2001=2014) が行ったアイデンティティに関する属性を参考に4つのタイプのいずれに当てはまるかを聞くこととした。
- 4) 本稿は今里基 (2017) にてその一部を扱っているが、拙稿の刊行以後にAさんに対して行った追加インタビューなどを交えて再構成したものである。本稿では筆者とAさん、また後述するBさんとの出会いに焦点を置いて考察するが、インタビューなど一部の項目は重複する箇所があることを予め断っておきたい。
- 5) 例えば、阪神大震災で被災したアーケードや中皮腫患者の自宅を例として挙げている。
- 6) 本稿では日本に住んでいるコリアンを在日コリアンと表記し、太平洋戦争前に朝鮮半島から来日した者及びその子孫をオールドカマー、またニューカマーのうち、諸説あるが日本で韓国人が急増するようになった1980年代以降に来日した韓国人とその子孫を韓国系ニューカマーと表記する。
- 7) 詳細は李 (2016) 第4章を参照。
- 8) 在日本大韓国民団「4. 婚姻状況」<https://www.mindan.org/shokai/toukei.html#04> (最終閲覧日 2017年11月20日)
- 9) インタビューにおける詳細な設問は今里 (2017) のpp.33-34を参照。
- 10) 日本における小学校に相当。1995年に初等学校に改称している。
- 11) 金雄基 (2016) によれば、在外同胞法第2条1項で通常海外に居住する韓国国民は在外国民とされ、また2015年1月22日から在外国民用住民登録制度が始まるまでは住民登録の枠組みにも入らなかったとされる。一方、Aさんの場合は父親が韓国にて居住していた市の住民として登録されていた。
- 12) ちなみにAさんも父親から「手足が伸びるように」とよく触られた経験があるという。
- 13) 2017年11月の補足のやり取りより。なお、補足的な質問を行う際にはSNSアプリ「カカオトーク」を使用した。

【参考文献】

- 李光奎・崔吉城. 2006『差別を生きる在日朝鮮人』第一書房
- 今井信雄. 2005「社会調査における制御可能性と不可能性」『先端社会研究』第3号、111-130
- 今里基. 2017「ニューカマーの日韓ダブルの「祖国留学」から見るエスニックアイデンティティの考察——オールドカマーとの比較から——」『Core Ethics』vol.13、25-36
- Erik Homburger Erikson. 1959 "Identity and the life cycle", International Universities Press. (エリック・エリクソン. 2011 西平直・中島由恵 (訳), 『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房)
- 川端浩平. 2014「<ダブル>がイシュー化する境界域——異なるルーツが交錯する在日コリアンの語りから」岩淵功一編著『<ハー

- フ>とは誰か』青弓社、222-242
- 金雄基. 2016「韓国社会における『最底辺の在外同胞』としての在日コリアン」『日本學報』第106輯、1-15
- 金泰泳. 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』世界思想社
- 金花芬・安本博司. 2011「コリア系ニューカマーの教育戦略：韓国人と朝鮮族の学校選択と家庭内使用言語を中心に」『人間社会学研究集録』6、27-49
- 児島明. 2013「ニューカマー青年の視点に立った移行支援の可能性」『異文化間教育』37号、32-46
- 志水宏吉・清水陸美（編）. 2001『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店
- 崔吉城. 2008「在日を考える—存在の二重性とニューカマーの比較」『季刊東北学』第17号、35-47
- 鄭幸子. 2010「韓国社会と在日韓国人2世、3世のアイデンティティ—の変容における一考察：韓国留学経験者を中心に」『東アジア研究』54号、61-78
- 塚田守. 2008「ライフストーリー・インタビューの可能性」『椋山女学園大学研究論集』第39号、1-12
- 朴貞玉. 2010「日本におけるニューカマー韓国人にとっての理想の子ども像 東京韓国学校に子どもを通学させる親の文化選択志向性を中心に」『日本學報』第85輯、233-245
- 福岡安則. 1993『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』中央公論社
- 福岡安則・金明秀. 1997『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会
- 三浦綾希子. 2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房
- 宮島喬・太田晴雄（編）. 2005『外国人の子どもと日本の教育—不就業問題と多文化共生の課題』東京大学出版会
- 安本博司. 2013「韓国人ニューカマーの母語継承に関する考察—在日との接触と意味づけの変遷に着目して—」『人間社会学研究集録』8、89-109
- . 2016「民族性継承への意味づけ：在日と韓国人ニューカマーに着目して」『女性学研究』23、131-153
- 윤다인. 2014『모국수학이 재일동포의 민족정체성에 미치는 영향에 관한연구』서울대학교 대학원 사회학과 2013년도 석사논문（=尹ダイイン. 2014『母国修学が在日同胞のエスニックアイデンティティに与える影響に関する研究』ソウル大学大学院社会学科 2013年度修士論文）
- 李洪章. 2016『在日朝鮮人という民族経験 個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院
- Rubén G. Rumbaut and Alejandro Portes. 2001, "Ethnicities : children of immigrants in America", University of California Press. (アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト. 2014 村井忠政（訳）『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』、明石書店)

To do interview survey as a non-participant: From a case of a Life History of half-Japanese-half-Korean

Hajime IMASATO

This paper studied how one half-Japanese-half-Korean woman expanded polyphyletic relationship with other half-Japanese-half-Korean and the author. The interview about her life history revealed that she built up an identity as half-Japanese-half-Korean from sharing a room with another half-Japanese-half-Korean in the university dormitory when she was an exchange student. The many interviews conducted by the author strengthened her awareness of her identity and raised the issue. The result finds that her identity has been developed by a succession of encounters, including the author's intervention as a researcher. It reveals the possibility that a researcher can broaden the identity of the interviewee by intervention.

Keywords : half-Japanese-half-Korean, immigrant, newcomer, life history

